

第36回（平成24年1月18日）評価委員会評価

今年度の連携排砂・通砂は、6月23日から6月24日にかけて連携排砂、6月25日から6月26日にかけて連携通砂と連続して実施され、細砂通過放流については、6月27日、28日、7月4日、8日、28日、29日の計6回実施された。

出し平ダムからの排砂量は、目標排砂量約45万 m^3 に対しシミュレーションによる検証ではあるが約39万 m^3 となり、排砂前に設けた想定変動範囲の約36万 m^3 から約48万 m^3 の内に収まる結果となった。

水質、底質および生物相の環境調査結果をみる限り、連携排砂および連携通砂による一時的な環境の変化はあるものの、大きな影響を及ぼしたとは考えられない。細砂通過放流においては、濁度の状況から通常の出洪水と同程度であったと考えられる。

今回の連携排砂・連携通砂・細砂通過放流における実施経過及び環境調査結果から以下の知見が得られた。

連携排砂・通砂について

連携通砂時において20年に1回程度の大きな出水があり、第2回細砂通過放流後の測量結果によると、約24万 m^3 の土砂が出し平ダムに堆積したものと考えられる。

細砂通過放流について

- ・再現シミュレーションは、環境調査結果や宇奈月ダムにおける流速観測などからも放流SS濃度、流速など概ね表現できていた。
- ・細砂通過放流の実施により、短時間集中豪雨に対する対策を実施できなかった平成20年に比べて、9月調査時のCODや強熱減量等の上昇が抑制されるなど、底質変質抑制の傾向がみられた。
- ・平成23年度連携排砂実施中の河川水質DOの最小値を見る限り、平成22年度に実施した短時間集中豪雨対策の実施効果が見受けられた。

水質調査について

湛水池及び河川では、一部の地点で既往の測定結果を上回った箇所があったが、全般的に概ね過去の測定値の範囲内であった。

海域では、代表4地点（C点、A点、河口沖、生地鼻）の調査を試みたが、時

化の影響により生地鼻沖地点のみの観測となった。結果は、概ね過去の測定値の範囲内であった。

底質調査について

湛水池では、

- ・ 連携通砂 1 日後の調査結果より、COD・全窒素および硫化物は、5月と9月の調査時に比べ概ね低かった。また、ORP（酸化還元電位）は高く、50%粒径の値はやや粗くなり、連携排砂および連携通砂の効果がみられた。

河川では、

- ・ 5月および9月における各調査地点の調査結果は大きな変動がなく、連携排砂・通砂・細砂通過放流の影響はほとんど認められなかった。
- ・ 今回の排砂後の措置の効果については、出水が連続したことから明確な効果を把握出来なかったが、連携排砂により河道内に堆積した泥分の割合が、その後の出水などで減少していることが確認できた。

海域では、

- ・ 5月および9月における各調査地点の調査結果は、一部の地点でCOD・全窒素・硫化物など既往の測定結果を上回ったが、概ね過去の変動の範囲内であった。

水生生物調査について

・ アユの肥満度について、出・洪水時において一時的に影響を受けるものの、その後は回復していることが確認できた。また、常願寺川においても同様の結果となった。今後も調査継続して、結果を注視していく必要がある。

今後の留意点

・ 連携排砂、通砂及び細砂通過放流の実施については、今回の審議内容を踏まえ、細砂通過放流の実施時期等を検討の上、次年度の排砂計画に反映させること。